



UNIV. OF
TSUKUBA FC

SHUKYU
CONNECTED

#03 前編



ミスターコンサドール

24期

曾田
雄志



筑波大学蹴球部は高等師範学校を起源とし、1896年から数えて129年の伝統を誇ります。「ゴールポストを全国に」を合言葉に多くのOBが教員となりサッカーを普及してきた歴史があります。蹴球部OBには田嶋幸三さん、井原正巳さん、最近では三笥薫選手などがいらっしゃり日本サッカー界を引っ張ってきました。サッカー業界以外にも他業界で活躍しているOBが多々いらっしゃいます。

SHUKYU CONECTEDはそんな様々なOBにインタビューを行い記事にすることで、現役部員がOBを、OBが他のOBを知る機会を増やし交流を促進させることが目的です。この記事を作成するにあたり多くのOBの活躍を知りました。それを少しでも知っていただけると幸いです。

第3回は北海道コンサドーレ札幌で9年間活躍され、引退後もアスリート支援をはじめとした様々な事業でご活躍されている曾田雄志さんです。曾田さんの唯一無二のキャリアや熱い思いを2回に分けてお届けします。

前編はサッカー選手としてのキャリアにフォーカスしていきます。

筑波大学入学の経緯について教えてください

出身は札幌南高校という進学校で制服も校則もなく、伝統があって自由なところを魅力に感じて入学しました。サッカーが好きだったのでそのまま部活に入りました。成績は1年生の時に北海道大会に行っただけで、あとは札幌市予選敗退でした。ちょうど私が1年生の時に、新校舎を建てる関係でグラウンドが使えなくなったので、河川敷の草むらで練習したり、顧問の先生も専門の方じゃなく練習内容も自分たちで考えたりなど、プロになるってことを考えるとかなり劣悪な環境だったと思います。札幌市選抜には入ってましたが、国体の選手には選ばれませんでした。プロになってみたいという思いは少し持っていました。絶対無理だと思っていました。

将来やりたい仕事が特になかったので、どこの大学に行けばいいか決めようが無い状態でした。ただ、小学校の時からずっとサッカーが好きで、中村俊輔さんや小野伸二さんの様な全国で活躍している人たちがどのくらいうまいのか気になりました。そこで、全国のトップレベルを体験して、上のレベルを目指すことに見切りを付けたと思います。それほど家庭が裕福ではなかったので、国立大学で全国的に一番強い大学を調べたところ筑波大学にたどり着きました。



蹴球部入部からプロが決まるまでの経緯を教えてください

筑波大学入学後、フレッシュマンコースを経て、よくて3軍か4軍に振り分けられると思っていたのですが、いきなりトップチームに入りました。自分も周りもびっくりで、後から聞いた話だとにかく身体能力が高いので粗削りだけど入れておこうとのことでした。身体能力が高く、ヘディングも強かったので残り10分あたりでパワープレー要員として、1年生から少しずつ試合に出ることが出来ました。「すげーじゃん」と周りからも言われましたし、自分もそんなにトップチームで出れると思わなかったので驚きでした。

2年生になると、当時中盤をやっていた私に監督から「身体能力が高いからフォワードをやれ」と言われ、中盤の選手に次の年も良い選手がいたので居場所がないからか何だかわからないですが、でも言われたらしょうがないと思って人生で初めてフォワードをやりました。しかし、1年間全くベンチに入ることが出来ず、木に登ってビデオ撮影をする日々が続きました。うまくなった気もせず、フォワードとしての自分の可能性も全く見いだせませんでした。シーズンが終わった12月から1月にこれ以上のレベルに自分は絶対にいけないと感じました。粘ってプロに夢を見いだして就職浪人する人もいると聞いていたことと、海外に行ってみたかったので、留学の手続きをして退部届を提出しました。

監督もすぐくびくりしていて、「おまえ2年で1軍じゃん、なんでだよ」など言われても、「これ以上サッカーをやっても無理だと思うのでやめます」と話をして部屋を後にしようとしたとき、入ってきた見知らぬ人に執拗に引き留められました。その人は、次のシーズンにトップチームのコーチをやる方でした。初対面の人にしつこく自分が何かを言われることがなかった方で、感化されてしまいました。なんだこの人はと思いつつも、正直自分は本当はサッカーが好きでやりたいけど、このまま続けていても無理だろうと諦め、逃げていたことも事実でした。自分が情けないという感情と、この人が何か導いてくれるのではないかという期待感からサッカーを続けることに決めました。

蹴球部入部からプロが決まるまでの経緯を教えてください

その後の合宿でフォワードとしての本当に基礎的な動き方など、最低限のことを教わると、春からレギュラーとして定着することが出来ました。結果的に3年生では中心選手としてリーグ戦優勝、総理大臣杯とインカレともに準優勝。個人でも関東選抜に選ばれデンソーカップで優秀選手、全日本大学選抜に選ばれました。この引き留めてくれたコーチは組長などと呼ばれている大槻毅さんでした。大槻さんは、自分の恩師みたいな人でとても感謝しています。

そんな風にして自分が成長したこともおそらくありますが、急激に自分の環境が変わりました。そして、3年生の終わりに初めて浦和レッズからオフアーをもらい、4年生になる頃には他にも川崎フロンターレ、セレッソ大阪、コンサドーレ札幌の4クラブからオフアーをいただきました。レギュラーになれた時にプロになれる可能性があるかとも思い始め、急激にプロというものが近づいてきて、なることが出来てしまったみたいな感じです。



急激にプロが近づいたと思う理由について 教えてください

ギフトというか、身体能力がとにかく高かったことはあると思います。ただ、小中高とサッカー専門の人に教わったことがありませんでした。小学校は本当に遊びの延長みたいな少年団で、中学校は体罰地獄みたいで、先輩からいじめられるような感じだったので全然楽しくなかったです。そして、高校では先ほど言ったように顧問の先生はいますが、専門の指導者がいない中だったので、「サッカーとは」みたいなことは全然分かってなかったです。自分の感覚でサッカーをやっていて、身体能力は高いけど、それを活かすようなスキルや、サッカーリテラシーみたいなものはなかったです。

筑波に来てからは、自分よりも圧倒的にうまい人やサッカーを知っている人に触れて、少しずつ自分の持っている能力を生かせるようになったというのはあると思います。

メンタルもすごく厳しい環境で揉まれてきたわけではないので、強いタイプでは元々なかったです。だから絶対俺が生き残るとか、絶対俺はプロになるんだっていう気持ちは持ったことがなかったです。ただ、試合に出たときに相手に対して自分ができるプレーが増えたり、変化している自分に嬉しさを感じて、自分はもつとうまくなれるチャンスがあるだとか、もっと上に行けるチャンスがあるんだみたいな向上心が自分をプロにまで引っ張ってくれました。

プロ生活について教えてください

まず、大学生の時にコンサドーレっていう名前になったことを知って、信じられないくらいダサいなと思ったのを覚えていました。そのチームからオフアが来たときにはっとしました。コンサドーレに決めたのには、当時の監督だった岡田武史さんが名指しで獲りたいと言ってくださったのがまず1つ大きかったです。また、J2からJ1に上がった年で、はじめからJ1できることもありましたが、札幌出身なので試合に出ている姿を親に見せることができるのは親孝行になるかなと思いました。あと、他のオフアをいただいたクラブだと、自分がライバルたちと競って本当に試合に出られるのかなと思ったのもあったので、できるだけ早く試合に出られるチャンスがあるという点を考えてコンサドーレ札幌に決めました。

1年目は、初めてベンチに入って試合に出たのが8月ぐらいでなかなか試合に出れないもんだなと思いましたし、プロのキーパーって異常に上手いなと感じました。シュートは全然入らない、ボールを受けてもすぐ取られる、試合にも絡めないという日々が続きました。その中で岡田さんやコーチの方々といういろいろなコミュニケーションをとりました。自分に今何が足りないのか、自分が目指す選手像とは何なのか等を言語化していくようなチャレンジをしました。そうして8月ぐらいに初めてベンチ入りしてからは、ずっとメンバーに入り続けました。

2年目は、柱谷哲二さんが監督として来ました。哲さんから見るとフォワードよりセンターバックの方が絶対日本代表に近づくと思ったらしく、キャンプで「お前センターバックやらないか、そっちの方が絶対上に行ける」と言われました。

プロ生活について教えてください

フォワードで去年も10試合くらい出ていて、もっと点を取ってレギュラーになりたいと思っていたので、またポジションが変わるのかと思いました。ボランチをやっているフォワードになった大学生の時の嫌な思い出もあったので、どうなんだろうと思っていました。ただ、当時のメンバーに結構フォワードが多く、外国人も取ってというのもあり、受け入れざるを得ない感じでセンターバックに転向しました。本当に0から、オフサイドってどうやってとるんだろうみたいなどころからスタートしました。ミスも多くありましたが、センターバックの方が良いかとも思い始めました。2年目の最後の方はフォワードとディフェンダーを行ったり来たりしましたが、3年目からは本格的にセンターバックに転向してほとんどの試合に出場するようになりました。6〜7年目くらいには通算250試合ぐらい中心選手として出て、気づいたら自分がコンサドーレができてから最も在籍が長いし、最も試合に出て、選手会長にもなっている立場になりました。また、J2だったのがJ1に昇格もできて、もしかしたら日本代表にもチャレンジできるかもしれないと、そのくらいの時期に思いました。途中で他クラブからオファーをいただいたこともあったらしいのですが、地元でやる方が自分に合っているのかなと思います、最後は3年くらいの複数年契約をさせてもらってコンサドーレでプロキャリアを終えました。



J1に昇格して、代表のチャンスもあるんじゃないかみたいなことを聞いていた頃に、大きな怪我をして半月板と腰のヘルニアと両膝の軟骨の手術をしました。最後は、1年8ヶ月くらいハビリしかしてなかったので、結局引退せざるを得なくなりました。そのあたりに一番プロとして大事なものを得ましたが、すごく厳しい時期でした。そのときは、選手会長で一番在籍が長くて、**ミスターコンサドーレ**とか言われて日本人の中では一番年俸も高いという立場でした。しかし、試合も練習もできず、クラブハウスに行って風呂に入って温めて、トレーナーにマッサージしてもらって帰るとというのが当時の私の仕事でした。それでお金をもらえるからいいじゃないかという考えもあるかもしれませんが、自分はプロ選手としてもっと成長したいし、もっとやってやりたいと思っているのにそれが自分のプロとしての仕事ということを受け入れるのが難しかったです。そんな中でも、何かできることが1つか2つはあると思い始めて、洗面所やトイレの掃除など気づいてできることは全部やろうと思いました。ベンチに入って試合に出たけど全然駄目で、またベンチから外されたりした後輩のケアだったりとか、ご飯に連れて行くとか、自分のリハビリとは別にそんなようなことばかりやる日々が1年8ヶ月続きました。

シーズンが終わるときに、来シーズンまでまだ契約が残っていたので、当時の強化部長と話をしました。試合も出れないで練習もできないやつに給料を払うのも負担になるから、そういう意味かなと思っていたらそうでもなくて、「お前の性格的にこのままトレーニングもあんまりできないのに、ずっといるのはどうなんだってのは自分の中であるかもしれないけど、例えば今シーズン終わった後にやっぱり引退しますと言われるたら俺たちは記者会見ぐらいしかしてあげることができない。でも、もし今シーズンの途中で辞める決断をするなら、監督に相談した上でだけど、最後のホーム戦でベンチに入ってもらって、札幌ドームでセレモニーをやってあげたいと思っているから考えてくれ」みたいなことを秋ぐらいに伝えられました。自分としてはもう1年プロとしてやりたかったけど、プロとして存在意義があるのかを考えたらどうなんだろうとも思いました。すごくうれしい話でしたけど、せっかくプロになって頑張ってきて1年でも長くやりたい仕事だったのでかなり迷いましたが、**選手を辞める決意**をしました。

プロ生活について教えてください

2週間くらいその試合までの時間があって、全体練習に参加すると言われてました。それまでリハビリしかしてなかったんで、全然練習の強度についていけませんでした。なおかつ痛みもあるので痛み止めの注射を毎日両膝と腰に4本ずつ、2週間で150本くらい打ってトレーニングをするという状態でした。監督は、あくまで公式戦であってセレモニーではないからベストメンバーを選ぶという方だったので、前々日か前日にメンバーが発表されるときにもまだ悩んだということでした。最終的にはメンバーに入れてもらいましたが、自分も若いときに全然ベンチに入れなくて、なんであの先輩が入ってるんだろうと思いついていたので、一枠を取ることがどれだけ若手のチャンス奪うことになるのかを理解していたこともあり、なんとも言えない気持ちではありましたが。最後の試合は3万人くらい入った札幌ドームで、試合終了の4分前に出ることで、なってロスタイムに自分がPKを取って自分で決めて終わるといふ奇跡的で最高の経験になりました。



大学時代、プロ生活を通して感じたことを 教えてください

サッカーをやってきて思ったのが、自分で思ったことや感じることが一番大事なんですよけど、自分のことをどこからか大切に見てくれる人がいるんだということは、大学の時にすごく感じました。プロになっても指導者やチームメイトととにかくコミュニケーションをとるようにして、今の自分の理解と外から見ている評価や理解が合っているかを考えました。プロにいるとすぐクビになってしまいますし、自分の可能性を開くのが遅かった人で終わってしまうのは嫌でした。だから、自分がそうじゃないと思っていても、誰かが言っているんだったらそれを少し試してみようとか、自分の可能性は自分だけでは見つけられないこともあるので、そういうチャレンジはしてきたと思います。結局、日本代表には入れなかったですし、ワールドカップにも出られず、J1よりJ2の方が多かったですが、9シーズンの間プロとしてやれたり、自分の筑波大の同期の中では一番プロの期間が長かったりと、Jリーグの中では結構やった範囲には入れたりしたので、すごくいい経験をさせてもらったと思います。

ミスターコンサドーレと呼ばれることについて どう思われますか

最初はすごく嫌でした。ミスターレッズの福田さんみたいな何百試合も出て、日本代表でも活躍している人のことをミスターと呼ぶんだろうなと思っていましたから。自分はコンサドーレの中ではそこそこでしたけど、代表にも入っていないですし、J1でもたくさん試合に出ていた訳ではないので、そう呼ばれることに違和感はずっとありました。でも、誰かが何かしらの期待を持って言ってくれたのが浸透して、全員が本当にそう思ってくれていたかは分かりませんが、そういうふうに呼ばれるようになったことが多くなったのは、ありがたいことなんだろうなと徐々に受け入れる様になったという感じです。ただ、自分から言うことはほとんどないです。



サッカー人生の中での気持ちの変化や大切に されていることについて教えてください

部活を辞めようと思った時は、サッカー以外にも楽しいことはありませんし、人生を豊かにするにはサッカーじゃなければいけないことはないと思いました。自分はサッカーが好きだけれど、野球が好きな人もいれば音楽が好きな人もいますし。自分の可能性を狭めたくなかったから、違う選択肢も良いんじゃないかと考えました。もちろんサッカーも好きなので、辞めることは自分にとってポジティブではなかったですけど、自分の可能性を広げるという意味で当時は退部を選ぼうとしました。

逆にプロ時代のリハビリ期間は、本当にネガティブな状態で受け入れるのが難しかったです。早く老化が来ているみたいな感覚がありました。おじいちゃん、おばあちゃんだってぼけたくてぼけていたり、目が見えなくなったりたくなっていたりする訳じゃないと思いますし、それが急速に来る感覚でした。あれだけ誰よりも早く高く飛べていたのが、全く飛べなくなってもできなくなる感覚が急に来たので、それを受け入れるのがすごく難しかったです。それでも今、自分がどうやらこのチームに存在していて、少しでも貢献できることは何なんだろうと、苦肉の策みたいな感じでゴミを拾ったり、掃除をしたり、後輩を励ましたりしていました。できることがあるのにやらない自分というのが、一番ネガティブなんじゃないかと思います。本当は百でやりたいけど、一しかできないならやる必要ないと思うかもしれないと思いますが、その中でも一でも二でもできることがあるならやってみた方が良いんじゃないかと思いました。

土台としてあったのは、昔から価値観が多様だった事だと思います。文学、アート、音楽、映画、建築、ファッションとか、そういうものが好きでした。体育会系にそういうものが好きな人は、あんまりいないかなと思うんです。体育会系と言ったら、分かりやすい価値観が好きだったり、同じ様なメンバーとつるんだりすることが多いように感じます。それはそれでいいと思いますが、同調圧力が高くなってしまうこともあると思います。

サッカー人生の中での気持ちの変化や大切に されていることについて教えてください

例えば、リーダー格の人が違うんじゃないかと言ったら、みんなそっちになびいてしまったり、先輩に「お前なんでそんなもの読んでんだよ」とか「ダサイ服着てるな」みたいに言われたら、確かにそうかもと思ったたりしてしまうと思うんです。それは違うと思っていて、価値観はそれぞれのものなので、そういう体育会系のみんなが同感的な感じが嫌だったのであんまりつるむこともなかったと思います。

そういう部分が良いか悪いかは分からないですけど、自分の元々のキャラクターとしてありました。だから、自分がやりたいことや自分が素直に思うことは悪ではないんじゃないかと、その評価は後々分かるだけで周りがするもんだという感じで、選択をしてきました。プロ引退時の話で言うと、普通感覚なら家族もいて、複数年契約っていう保険みたいなものを自分のプロ意識と照らし合わせて放棄したことがあります。家族としてはどうして？となるかもしれませんが、自分はその方が良いんじゃないかと思ってそういう選択をしました。自分で選ぶというか、**自分の価値観と自分の判断に基づいて選択をする**ということをしてきましたし、今もそうしています。

